

Glocal Tenri



8

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.21 No.8 August 2020

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
概念の違い
／永尾教昭 1
- ・ 日本語教育と海外伝道 (25)
歴史の中の留学生④
／大内泰夫 2
- ・ キルケゴールで読み解く 21 世紀 (23)
思想の普遍性と特殊性の逆説的関係
／金子 昭 3
- ・ イスラームから見た世界 (4)
天理教とイスラームの出会い②
／澤井 真 4
- ・ 伝道と翻訳—受容と変容の“はざま”で—(24)
仏典翻訳の歴史とその変遷 ⑦
／成田道広 5
- ・ 遺跡からのメッセージ (60)
清水風遺跡で発見された「鹿と武人の絵画土器」
／桑原久男 6
- ・ コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関
係試論 (34)
植民地の歴史認識の再考へ
／森 洋明 7
- ・ コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観
と教への伝播— (11)
5. コロンビアの体質 2
／清水直太郎 8
- ・ 天理参考館から (21)
スポーツの歴史と文化 (2) 「走る」その 2
／幡鎌真理 9
- ・ ヴァチカン便り (45)
ミサの再開
／山口英雄 10
- ・ 思案・試案・私案
「碑」の字表記問題再考 (8)
／八木三郎 11
- ・ おやさと研究所ニュース 12
『グローカル天理』年間購読のご案内

巻頭言

概念の違い

おやさと研究所長 永尾教昭 *Noriaki Nagao*

海外で天理教の布教をする場合、厄介な一つの問題は概念の違いであろう。つまり、天理教の教理の中にあるものが、その国にその概念が存在しない場合、いか

に得心させるかが問題となる。天理教は仏教に由来するものではないが、その教理には仏教徒には理解しやすいものも少なくない。例えば、いんねん、生まれ変わりの教理などがそうだろう。天理教で説くこれらと、仏教の因果応報や輪廻転生とは同じではない。ただ、これらを知識として知っている仏教徒には、天理教の教理を理解する手がかりが多くある。

一方で、いわゆるセム系宗教の信仰を主とする欧米圏などの人たちに、生まれ変わりという概念はないと思われるので、それらは理解の範疇外にある。事実、筆者は天理教ヨーロッパ出張所長を務めていた頃、ほぼ毎年、カトリックの在家集団などが主催する多宗教ミーティングに参加したが、ある年、その席で正教系の聖職者から「あなたは、本当に今の奥さんと前生からの縁で結ばれたと信じているのか」と問われた。天理教には、夫婦、あるいは家族となるのは偶然ではなく、前生もしくはさらに遡っての深いいんねん、言い換えれば神の思惑があってそうなるのだという教理がある。したがって、筆者はその際「もちろん、そうだ」と答えると、彼は驚いて「信じられない」と言ったことを鮮明に記憶している。確かに、そもそも生まれ変わりを説かない信仰者が、前生のいんねんなど理解できるはずがない。

また天理教には、結婚した女性は、いんねんある元の家に戻るのだという教理がある。これについては、欧米はもとより、同じアジアの韓国や台湾でも理解が難しいのではない。この両国は夫婦別姓、つまり結婚しても妻は夫の姓に変わるわけではない。また、ある姓を残すために夫が

妻の姓を名乗る、養子という制度もないだろう。こうなると、日本の、いわゆる「家」という概念は生まれえないのではない。したがって、元の家に戻ると説けば、何か物理的な意味で、元々住んでいた家屋にまた住むのだといった誤った理解さえされかねないのではないかと思う。

さらに、やはり所長を務めていた頃、あるフランス人信者から「天理教の教理は素晴らしいが、働くことが喜びとは、どうしても理解できない」と言われたことがある。確かにキリスト教では、安息日がホリデー、つまり聖なる日であり、労働はどちらかと言えば強制された義務、あるいは行という観念の方が強いだろう。もっとも、プロテスタントではマックス・ヴェーバーがその著書の中で「世俗的日常労働に宗教的意義を認める思想を生み、……『天職』という概念の中にはプロテスタントのあらゆる教派の中心的教義が表出されている⁽¹⁾」と述べているように、労働をむしろ天職と考え尊重したとされるが、伝統的なカトリックは必ずしもそうではないだろう。したがって、天理教の働く喜びという教義が理解できなかったのだ。

こういう場合、どうすべきか。ここは時間がかかっても婉曲的表現をするのではなく正面突破、つまり教理をまっすぐに説いていかに得ないのではないかと。概念がないから、この教理は説かないという姿勢はいずれ綻びが見えてしまうと思う。ただ一旦回り道をしたほうが良いと思う事柄もある。神に対する「お供え」などは、教会への献金という形から入った方が良いと思う。

[註]

(1) マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(大塚久雄訳)岩波文庫、1989年改訳、109頁。